母親の社会参加不安と子育て支援

―支援グループでの母子観察による事例検討から―

16006PCM　小島　有紀子

Ⅰ．問題

1.　児童虐待の背景要因

児童虐待の背景要因は,密室内にいる母親が,母性神話によって追いつめられることとされてきたが，近年では母親の社会参加が虐待のリスクを軽減するという意見も見られるようになっている。つまり母親の内に隠された社会参加不安が要因である可能性について検討する必要があると言える。

2.　親支援の必要性

鈴木（2011）は母親グループに対するグループ・アプローチ研究から，安心できる場を得ることが，虐待のリスクを持った母親が自己課題に取り組むために必要であるとしている。つまり，虐待を未然に防ぐ受け皿としての支援グループは親支援にとって必要性が高いと言える。

3.　母親による子育て支援グループ

鷹取・後藤（2016）は，子育て支援の１つのモデルとして「母になる」ために３本の発達ラインを想定した。そして半構造化された２つの母親グループ・ワークを通して，想定した３本の発達ラインの検証と，１ つの子育て支援のモデルを検討した。そして現代の母親たちは，表面的な役割行動の習得により『よい母親』である自分を構築しようとしているが，きっかけさえあれば，自己課題に向き合おうとする準備性があることに触れ，そのためには，ファシリテートの仕方に検討の余地があることを示唆している。支援グループという体制をとっても，母親が内的体験について触れることは難しいことがわかった。

4.　ドゥーラについて

M. H. Klaus, J. H. Kennell（1982）がギリシャ語で『他の女性を援助する女性』という意味を持つ支援的同伴者と定義した。そして研究によってお産において医学的な効果があるとしている。しかし支援グループにおいてドゥーラの出現が期待されず，他の母子に関与しなかったり（春木，2016），母親としての役割行動を習得するための情報交換の場となっている（鷹取・後藤，2016）。

Ⅱ．本研究の目的

子育て支援センターに通う母子を対象とした観察を通して，母子関係の特質と母親自身の心の課題，子どもの行動の変化過程から，ドゥーラやその効果の有無・要因に加え，母親の潜在的な社会参加不安の背景要因を検討する。そして支援初心者による対象者への関わり方の指針を作る点に集約される。

Ⅲ．方法

研究協力者：A 市内に設置されている子育て支援センターを利用している母親（33 歳）と男児 E（1 歳 4 ヶ月）を対象とした。家族構成は母親，夫(33 歳)，長女(3 歳)，男児 A であった。

母子観察：子育て支援センター内で開催されている無料の遊び場にて自然観察を行った。観察内容は，母子のやり取り，母親の行動，子どもの行動，対象母子と交流する周囲の人間関係のも含めたものとし，観察者の記憶に留めたうえで逐語的に記録した。観察記録に基づいて，後日指導担当と内容を検討した。期間を 10 ヵ月間とし，原則週に１回１時間行った。その後に家庭での男児の様子，遊びについてのコメント等についてインタビューを行った。

母親への心理検査：観察期間前後に家族イメージ・テストと三つの家を実施し，観察期間終了後は前述の検査に加えてロールシャッハ・テストと枠ありバウム・テストを実施した。

Ⅳ．結果

1.　母子観察からみる特徴

母親は男児 E 発信のメッセージに対する反応が見られなかったり，時に男児 E に対しての指

示や注意が多い傾向にあった。そして男児Eへの情動調律については，調律が一方的になることでE児の調律的な反応を引き出さなかったり反応を誤ったり反応自体を示さなかったりすることが目立った。

対して男児Eは，母親に対する『僕を見て』という過剰アピールに加えて，周囲の子どもや大人に対して関係性が開かれておらず，母親と1対1の関係に執着する傾向にあった。また言語発達がやや遅れていることが分かった。

2. 母親の家族イメージの特徴

観察前は実母との距離が近く，実父や夫を遠ざける傾向にあった。つまり母親の実母との未分離状態に加えて,父親イメージが希薄であり，心理的な分離個体化がなされていないことが考えられた。しかし観察終了後は，実母との距離が少しとれるようになり，長女を介することで夫と近い距離を持てるようになっていた。これは男児を育てることにより，母親の中に少しずつ男性イメージが修復されていくことに加え，実父や夫が実際に子どもたちと関わる姿を見ることで，徐々に良い父親イメージを回復していることが考えられた。

3. 母親の性格傾向の特徴

自他の境界線が曖昧な傾向にあり，外からの刺激によって怒りや悲しみなどの情動が引き出されやすい。同時に，怒りや悲しみの背景には評価され承認されない事への不安や自己愛の傷つきが推測された。そして対象イメージが安定せず，外的な刺激に対する認知や体験・意味づけの仕方は,自らの経験がベースとなっていた。しかし判断の明確化を避けることで，人間関係を円滑にしようとする傾向がみられた。

Ⅴ．考察

1. 母親の取り組み課題

得られた結果から，この母親の取り組み課題は，①子ども目線の獲得，②異質な価値規範を受け入れることへの恐れ，という2点が挙げられる。そして母親のE児に対する関係性の持ち方は一貫しているが,第3子が生まれることで,母親の男の子に対する異質感が和らぐ可能性が考えられる。しかしそのことを男児Aが良いと捉えるかどうかは未知数である。

2. 母の内的課題との関係

母親の内にあるものとして，①「父の娘」になりきれなかった寂しさ，②自分に対する疑念や隠された罪障感の2点が考えられる。これは異質な価値規範を受け入れられないことと，依存欲求を持つことによって，関係が限定されることへ繋がっている。そしてその関係性の持ち方が子どもにも投影され，母と子それぞれの関係性の持ち方が連動していることが考えられる。

3. ドゥーラが見られない要因

本事例では母子間の結びつきが非常に強く，周囲が介入しづらい状態にあった。また母親は異質な価値規範を受け入れることへの恐れを持っており，周囲から働きかけられないと対人関係を築くことを回避している。そのような状態の中でも，子どもによって顔見知りでない母親と関係を築く機会を得てはいるが，遊び場内で当たり障りのない関係を構築することに焦点が置かれているため，ドゥーラが見られなかったと考える。

4. この事例から考えられる子育て支援

本研究で対象としたE児は，メッセージの発信方法や行動パターンが独特であった。これは母親とり『問題行動』として受け取られるため，子どもの願いは母親に届かないことが目立った。つまり子ども目線や内的体験は見落とされることが多く，子どもの表面的な対処に囚われると操作的になってしまう。大人の社会常識でなく，子ども目線で考えることを支援するためには，より専門的な知見を持っている支援者である必要がある。よって支援初心者は，円滑な母子関係を支援するためにも，子どもの行動が持つ意味を理解，母親に分かる形でフィードバックする能力が求められる。また母親は社会参加不安を持ちながら，長女が幼い頃から遊び場に通っている。この矛盾について，母親は実母の替わりとなる依存対象の獲得と,「個人としての自己（春木・後藤，2016）」を満たすために，遊び場を利用していたのではないかと推測する。その思いを受けとめるための受け皿としての機能は引き続き果たす必要がある。